

9章 近世IV

問題

【1】

解答

- 1 a・c 2 b・c 3 c・d 4 d・e 5 a・c 6 a・e
7 d・e 8 a・d 9 b・d 10 b・c 11 c・e 12 c
13 a・b

解説

フランスのルイ14世を中心に、17世紀半ば～18世紀初頭のヨーロッパを眺めた問題。3がやや難しいが、他の設問は、基本的な事項と年代の知識があれば解けるだろう。

- 1 マザランが宰相だったのは1642～61年である。この間の出来事は、aのウェストファリア条約の締結（1648）と、cのフロンドの乱（1648～53）の鎮圧である。他の選択肢について見てみよう。bのナントの王令の発布（1598）とeのフランス東インド会社創設（1604）はアンリ4世（位1589～1610）の時代の出来事である。フランス東インド会社の経営は不振だったが、これを再建（1664）したのがルイ14世の時代のコルベールである。dの三部会召集の停止（1615）は、ルイ13世（位1610～43）の時代である。
- 2 aの三部会の召集とは、フィリップ4世による最初の召集（1302）と、先に述べたルイ13世の三部会召集の停止のちルイ16世が行った1789年の召集の2回が考えられるが、いずれも当てはまらない。bのナントの王令廃止（1685）は、ルイ14世の親政（1661～1715）の時代の出来事である。cの財務長官コルベール（任1665～72）はルイ14世の親政の時代に活躍した人物である。dのエグノー戦争の終結はナントの王令の発布と同時に、アンリ4世の時代である（1598）。eの宰相リシュリュー（任1624～42）はルイ13世に仕えた人物である。よって正解はbとcとなる。
- 3 それぞれの人物が活躍した時代に焦点を当てて消去法を用いてみよう。aのファン＝アイク兄弟（兄1366頃～1426、弟1380頃～1441）はルネサンス期のフランドル派の画家で、bのデューラー（1471～1528）もルネサンス期のドイツの画家である。cのルーベンス（1577～1640）、dのファン＝ダイク（1599～1641）はいずれもバロック様式の画家である。そしてeのダヴィド（1748～1825）は「ナポレオンの戴冠式」で有名な古典主義の画家である。ルイ14世の治世は1643～1715年であるから、多少時代が前後するが、ルーベンスとファン＝ダイクが最も適当ということになる。
- 4 ルイ14世の宫廷での文学方面での代表者としては、古典主義悲劇のコルネイユ・ラシヌ、古典喜劇のモリエールを覚えておこう。消去法でも、選択肢の中でフランス人はモンテニュ・コルネイユ・モリエールの3人のみで、モンテニュはルネサンス期の『隨想録』で有名な人物だから、すぐに絞り込めるだろう。
- 5 歴代のフランス王の関わった対外戦争を時代順に並べてみると、オランダ侵略戦争（1672

～78) とスペイン継承戦争 (1701～13) はルイ 14 世の、オーストリア継承戦争 (1740～48) はルイ 15 世の時代の出来事である。なお、北欧の大國スウェーデンの没落と新興ロシアの台頭を決定付けた北方戦争 (1700～21) にはフランスは干渉しておらず、ユグノー戦争 (1562～98) は対外戦争ではなくフランス国内の宗教内乱である。

6 オランダ侵略戦争の講和条約はナイマー＝ヘン和約 (1679)，スペイン継承戦争の講和条約はユトレヒト条約 (1713) である。その他の選択肢について、b のアミアンの和約はナポレオン戦争中の 1802 年に結ばれた英仏間の休戦条約である。c のサン＝ステファノ条約は 1878 年にロシアとオスマン帝国の間に結ばれた露土戦争の講和条約で、これによりロシアのバルカン進出は成功したかに見えたが、ロシアの台頭を恐れたイギリス・オーストリアらの反対によるベルリン会議 (1878) でその夢はついえた。d のパリー和約 (パリ条約；1763) は七年戦争と同時に北米植民地で展開したフレンチ＝インディアン戦争の講和条約で、イギリスとフランス・スペイン間で締結された。この条約でイギリスはフランスからミシシッピ川以東のルイジアナやカナダを獲得している。

7 a はラ・シュタット条約 (1714) の内容で、ここでいう「北イタリア」とはミラノをさす。この条約はスペイン継承戦争の講和条約で、ユトレヒト条約の後に結ばれ、スペイン継承戦争はこれをもって完全に終結した。b は先に述べたパリ条約の項目である。c は三十年戦争の講和条約であるウェストファリア条約の内容で、この時オランダの独立と同時にスイスの独立も国際的に承認されたことを押さえておきたい。d はユトレヒト条約。この時イギリスはフランスからニューファンドランドの他にハドソン湾地方、アカディアも得ている。e もユトレヒト条約。この時にイギリスがスペインから獲得したのはジブラルタルとミノルカ島であった。よって問 6 の条約のなかで、ルイ 14 世が結んだ条約 (= ユトレヒト条約・ナイマー＝ヘン和約) と関係があるのは、選択肢 d・e となる。

8 a ここでいうスペイン無敵艦隊の敗北とはアルマダ戦争 (1588) での敗北をさすが、フェリペ 2 世の無敵艦隊を破ったのはイギリスのエリザベス 1 世である。よって a は誤り。

b スペイン王カルロス 1 世 (位 1516～56) は即位 3 年後の 1519 年に神聖ローマ皇帝カール 5 世として即位した。ルターが九十五カ条の論題を発表して宗教改革を起こしたのが 1517 年であり、アウクスブルクの宗教和議は 1555 年。まさに問題文の条件に合致する。

c フェリペ 2 世はレパントの海戦 (1571) で強敵オスマン帝国を破り、1580 年にはポルトガルを併合してその海外領土を獲得し、“太陽の沈まぬ国”を築くなど、スペイン王国の全盛期を現出したが、その一方ではオランダ独立戦争 (1568～1609) が起こるなど、衰退へのきざしも見え始めていた。

d スペイン王国の成立は 1479 年であるので、15 世紀末の出来事である。

e スペイン王国によるナスル朝最後の拠点グラナダの陥落は 1492 年の出来事で、この年コロンブスはスペインの港パロスを出航し、西インド諸島の一部サンサルバドル島に到達した。

9 「フランスが領有した海外植民地」という条件で消去法を用いると、ポルトガルが領有したインドのゴア (1510)，マラッカ (1511)，セイロン (1505) が消せる。残った北米のルイジアナ (1682) とインドのポンディシェリ (1672～74) がフランスの海外領土である。

10 先にも述べた通り、ルイ 14 世の治世は 1643～1715 年である。ここで選択肢の年代を確定していく。a のチャールズ 1 世に対して議会が権利の請願を提出したのが 1628 年，b の

共和政の樹立が1649年（～60），cのチャールズ2世（位1660～85）の専制政治に対する人身保護法の制定が1679年，dのウォルポールの首相就任が1721年，eのアダム＝スミスが『諸国民の富（国富論）』を著したのが1776年である。よって正解はbとcになる。チャールズ2世はいとこのルイ14世の絶対王政に憧れ、フランスと通じてカトリックと絶対王政の復活をはかった。これを背景に1673年に審査法、79年に人身保護法が議会を通過したことを覚えておくと、このような選択肢にも対処しやすくなるだろう。

11 aのネーデルラントの北部7州による独立宣言およびネーデルラント連邦共和国の成立が1581年，bのオランダ東インド会社創設が1602年，cの東インド会社によるケープ植民地経営が1652年の出来事である。dはナポレオン戦争後のウィーン議定書（1815）で定められた内容。この時に併合されたベルギーは、宗教的問題もあって（オランダでは新教徒が、ベルギーでは旧教徒が多い）1830年にオランダ立憲王国から独立することになる。eは1664年の出来事である。以上によりルイ14世の時代に当てはまるのは、cとeとなる。

12 イギリスでただ一度だけの共和政下で、クロムウェルは航海法（1651）を制定した。これをきっかけに、イギリスとオランダが3度にわたって戦争を展開したのがイギリス＝オランダ戦争（英蘭戦争；1652～54, 65～67, 72～74）である。この勝利により、イギリスはオランダの海上霸権を奪った。

13 aのロシアのピョートル1世と清の康熙帝によるネルチ NSK条約の締結が1689年，bのムガル帝国の第6代皇帝アウラングゼーブの治世は1658～1707年である。cのマテオ＝リッチ（1552～1610）が明に入ったのは1583年で、1601年に北京での居住を許された。dのセポイの動乱（シバーヒーの反乱）は1857～59年，eのヴァージニア植民地の開拓は1607年（ウォルター＝ローリーによる1584～85年の植民は失敗している）。よってaとbが正解となる。

【2】

解答

設問1 1 身分制議会 2 重金主義 3 貿易差額主義 4 リシリュード
5 高等法院 6 マザラン 7 コルベール

設問2 シャルル7世 設問3 ポーダン 設問4 ボシュエ 設問5 間屋制度

設問6 フランソワ1世

解説

絶対王政の成立過程とその性格、およびフランス絶対王政の形成についてまとめた問題。学習状況の確認に最適である。

設問1 1 身分制議会は、聖職者・貴族・平民の身分代表によって構成され、課税承認を主な権限とし、国王の恣意的課税に反対した。イギリスでは1265年に聖職者・貴族に都市と州の代表を加えた集まりが持たれ（イギリス議会の起源）、1295年には模範議会が召集された。他国ではフランスの三部会・ドイツの帝国議会・スペインのコルテスなどの身分制議会が成立した。

2・3 問題文の空欄の前に書かれているそれぞれの説明を読めばよい。

4・5 ルイ13世の宰相リシュリューは高等法院の権限を縮小し、三部会の召集を停止することで、絶対王政確立に努力した。王の勅令は高等法院が認め登録されて初めて効力を發揮し、また勅令を審議する権利も高等法院は有したため、しばしば王権と対立していた。

6・7 リシュリューの後を継いだマザランは、幼少のルイ14世の宰相として高等法院や貴族が王権による中央集権化に反発して起こしたフロンドの乱（1648～53）を平定し、王権強化に成功した。1661年にマザランが死亡すると、ルイ14世の親政が開始され、1665年に財務総監に任じられたのがコルベールである。東インド会社の再建や王立マニュファクチュアの設立などの産業保護政策を採った。

設問2 シャルル7世は常備軍の創設や、大商人ジャック＝クールを用いての税制の整備に努めた。

設問3 やや難問。ボーダンは国家主権の絶対性と、主権保持者としての君主の絶対性を説いた。「王権神授説を唱え、『国家論』を著したフランス人政治家・思想家」として記憶しておくこと。

設問4 ポシェエはルイ14世に仕えて王権神授説を唱えた聖職者。教皇に対してはフランスの教会の独立性を訴えるガリカニスムを主張した。

設問5 問屋制度により商人が生産者を支配することとなる。問屋制度は15～16世紀にイギリスやネーデルラントなどの農村工業の成立が見られた地域で展開された。

設問6 フランソワ1世については、政治面では、神聖ローマ皇帝カール5世と対立したこと、オスマン皇帝スレイマン1世と同盟したことを確認しておくこと。フランソワ1世は1539年の勅令で公的文章でのフランス語の使用を義務づけ、王国の言語的統一を推進した。

【3】

解答

問1 1 b 2 a 3 e 問2 a 問3 属領（国）：g 国王：d

問4 b 問5 c 問6 d 問7 c

問8 ① f ② d ③ b・d・e

解説

基本的な問題が多数を占める。三十年戦争は宗教戦争であったが、オーストリア＝ハプスブルク家とフランス＝ブルボン家の対立も絡み政治戦争へとその性格を変えた。ウェストファリア条約によって神聖ローマ帝国は事実上解体し有名無実化する中で、プロイセンの勢力が伸長し、やがてオーストリアとプロイセンがシェレジエンをめぐって対立する、という一連の流れについて、地図などを参照しながら改めて確認しておこう。

問1 1 1648年にウェストファリア地方のミュンスターとオスナブリュックの2市で三十年戦争の講和条約であるウェストファリア条約が結ばれ、ヨーロッパの大半の国が参加した。この条約において、ドイツの諸侯・都市の主権が承認され、神聖ローマ帝国は事実上解体（有名無実化）した。支配者の宗教の原則（宗教を選択できるのは領邦諸侯と帝国都市）を確認し、カルヴァン派が承認された。フランスがアルザスとロレーヌの一部を獲得、スウェーデンが西ポンメルン（バルト海南岸）を獲得しバルト海の制海権を掌握、プロイセンが東ポン

メルンを獲得し、すでに当事国間で独立を認められていたオランダ・スイスの独立が国際的に承認されるなど、内容は盛りだくさんである。

2 カール6世（位1711～40）が王位継承法（プラグマティシュ＝ザンクティオン；1713）でハプスブルク家世襲領の永久不分割と女子相続権を定め、男子の相続人が欠落した場合も第1子の女子の相続を可能とした（マリア＝テレジアの即位が可能になるように規定）ことが、オーストリア継承戦争勃発の背景。アーヘンの和約（1748）でマリア＝テレジアのハプスブルク家領相続、およびプロイセンによるシェレジエンの領有が承認された。

3 フベルトゥスブルク条約（1763）において、プロイセンのシェレジエン領有が再確認された。（英・仏間についてはパリ条約で講和）

問2・問3 アウクスブルクの宗教和議（1555）以後も、ドイツ内の諸侯は新旧両派に分かれて対立を繰り返していた。旧教国のフランスは地理的にオーストリア＝ハプスブルク家領とスペイン＝ハプスブルク家領に挟まれていたために、反ハプスブルク政策から新教側についたことがポイント。

三十年戦争の経過は以下の4期に分けられる。

- ①ベーメンでは貴族たちが神聖ローマ皇帝から信仰の自由を認められていたが、ベーメン王（フェルディナント2世、後に神聖ローマ皇帝）による新教徒弾圧・カトリック強制に対し新教徒が反乱を起こした。
- ②デンマーク王でルター派のクリスチャン4世（位1588～1648）が参戦、皇帝側（カトリック）の傭兵隊長ヴァレンシュタインと戦うが敗北した。
- ③スウェーデン王でルター派のゲスタフ＝アドルフ（位1611～32）が参戦しリュッツェンの戦い（1632）でヴァレンシュタイン率いる皇帝軍に勝利するが、ゲスタフ＝アドルフは戦死した。その後ヴァレンシュタインは皇帝の疑惑と宫廷の反発から免職され暗殺された。
- ④旧教国フランスの宰相リュリューがスウェーデンと結び、新教側に参戦した。三十年戦争は宗教戦争からハプスブルク家対ブルボン家の政治戦争へと性格を変え、新教側優勢のうちに休戦した。

問4 アルザス・ロレーヌは鉱産資源の豊かな地域であり、フランスとドイツがその領有をめぐってたたかひ争った。ドイツ名はエルザス・ロートリンゲン。メルセン条約（870）で東フランク領、ウェストファリア条約でフランス領、普仏戦争後のフランクフルト講和条約（1871）でドイツ帝国領、第一次世界大戦後のヴェルサイユ条約（1919）でフランス領となる。

問5 スペイン王カルロス2世（位1665～1700）の死によりスペイン＝ハプスブルク家は断絶し、母も后もスペイン＝ハプスブルク出身のルイ14世は孫フェリペ5世をスペイン王に即位させた（1700）が、列国が反対し、スペイン継承戦争が勃発した（フランス・スペイン対オーストリア・イギリス・オランダなど）。戦争はフランス劣勢のうちに終結し、ユトレヒト条約（1713）でフランスとスペインが合体しないことを条件にフェリペ5世（位1700～24、24～46）の即位が承認され、スペイン＝ブルボン朝が成立した。フランスからイギリスへハドソン湾地方・ニューファンドランド・アカディアを割譲、スペインからイギリスへジブラルタル・ミノルカ島を割譲した。またユトレヒト条約で英仏のアン女王戦争の講和も成立した。翌1714年のラシュタット条約では、スペインからオーストリアへ南ネーデルラント・ミラノ・ナポリ・サルデニヤが割譲された。

三十年戦争の惨状を見たグロティウスは、『戦争と平和の法』（1625）で国際法を提唱、スペイン継承戦争ではサン＝ピエールが『永久平和草案』で国際機構設置による平和維持を主張し、カントやルソーに影響を与えた。

問6 プロイセン王フリードリヒ2世（大王；位1740～86）は啓蒙専制君主の典型。“君主は国家第一の僕”（『反マキャベリ論』）と称し、農業を重視し、産業を保護・育成した。フリードリヒ＝ヴィルヘルム1世（位1713～40）を受け継ぎ、軍事力の強化も行い、国家教育に努力し学術を奨励した。オーストリア継承戦争（1740～48）に参戦してシュレジエンを獲得、七年戦争（1756～63）でもシュレジエンを確保した。また第1回ポーランド分割（1772）に参加し東部に領土を拡大した。

学問を振興しベルリン科学アカデミーの拡充・整備、芸術の保護や啓蒙思想家のヴォルテールとの交流、信仰の自由を認めるなど、文化面についても積極的に関与した。ロココ式のサンスーシ宮殿建設（ベルリン郊外のポツダム）も押さえておこう。

問7 マリア＝テレジアがプロイセンからシュレジエンを奪還するためイタリア戦争（1494～1559）以来の宿敵であるフランス（ブルボン家）と同盟を結んだことを外交革命と呼ぶ。プロイセン王フリードリヒ2世はフランスとフレンチ＝インディアン戦争中のイギリスの援助を受けた。

問8 英仏の北米植民地をめぐる抗争については以下のようにまとめられる。

① ウィリアム王戦争（1689～97）

：ヨーロッパではファルツ継承戦争（1688～97）

→ライスワイク条約（1697）で終結。

② アン女王戦争（1702～13）

：ヨーロッパではスペイン継承戦争（1701～13）

→ユトレヒト条約（1713）でフランスからイギリスへアカディア・ニューファンドランド・ハドソン湾地方割譲（スペインからイギリスへジブラルタル・ミノルカ島を割譲）

③ ジョージ王戦争（1744～48）

：ヨーロッパではオーストリア継承戦争（1740～48）

：インドでは第1次カーナティック戦争（1744～48）

→アーヘンの和約（1748）で占領地の相互返還。

④ フレンチ＝インディアン戦争（1755～63）

：ヨーロッパでは七年戦争（1756～63）

：インドのプラッシーの戦い（1757）でクライヴ（英）が、フランス・ベンガル太守連合軍を撃破しベンガルを制圧。

：南インドでは第3次カーナティック戦争（1758～61）

→英がケベック占領（1759）

→パリ条約（1763）でフランスからイギリスへカナダ・ミシシッピ以東のルイジアナ・ドミニカ（西インド諸島の一部）・セネガルを割譲。（スペインからイギリスへフロリダ割譲、フランスからスペインへミシシッピ以西のルイジアナを割譲→1800年にフランスへ返還）

ユトレヒト条約の内容とパリ条約の内容を混乱しないこと。

【4】

解答

問(a) 2 問(b) 1 問(c) 5 問(d) 5 問(e) 5 問(f) 5 問(g) 1
問(h) 5

解説

ロシア絶対王政期の代表的な皇帝であるピョートル1世とエカチェリーナ2世に関する問題。標準レベルをひとひねりしてあるので、じっくりと問題文を読む必要がある。

問(a) 一見難しそうに見えるが、設問の選択肢を検討してみると、イヴァン3世とイヴァン4世はモスクワ大公国の王、カール6世は神聖ローマ皇帝、カール10世はおそらく北方戦争(1700～21)時のスウェーデン王カール12世にひっかけたダミーの選択肢と思われる。

2のイヴァン5世しか文意に該当する人物は見当たらない。よってこのイヴァン5世が正解。

問(b) ピョートル1世が人頭税の導入を行ったことを知らなくても、他の選択肢が内容に合わないので、消去法で解答可能。

問(c) やや難。北方戦争でロシア側にはポーランドとデンマークがついていた。

問(d) 難関私立大では東と西の同時代での出来事を問うことが多いので、今回の問題のように、東と西の皇帝の間に結ばれた条約などについては、必ずその当時の君主の名をチェックしておく必要がある。1689年のネルチンスク条約はピョートル1世と清朝康熙帝の間で結ばれたが、1727年のキャフタ条約はピョートル2世と雍正帝とで結ばれている。このうちのロシアの東方進出と、ロシア・清朝間で結ばれた条約(アイゲン条約〔1858〕、北京条約〔1860〕、イリ条約〔1881〕)は、近・現代史の中で重要なものになってくるので、ここではその背景としてネルチンスク条約とキャフタ条約の内容をしっかりと押さえておくこと。

問(e) 基本問題。ヴォルテールはプロイセンのフリードリヒ2世とも交流を持った。

問(f) ロシア絶対王政期の農民反乱として、ロマノフ朝初期のステンカ＝ラージンの乱(1670～71)と、エカチェリーナ2世期のプガチョフの反乱(1773～75)がとくに重要。1は、プガチョフの反乱は南ロシアで発生したので誤り。2はプガチョフは指導者の人名なので誤り。3・4は、プガチョフの反乱とは貧しいコサックの農民たちが、農奴制の廃止などを訴えたものなので誤りとなる。

問(g) これも基本問題。コシューシコは今でもポーランド救国の英雄として、ポーランド国民の尊敬を受けている。

問(h) 第2回ポーランド分割は1793年に行われたが、フランス王妃マリー＝アントワネットの実家オーストリア＝ハプスブルク家が1789年に勃発したフランス革命への対策に追われていたため、オーストリアは不参加だった。よって正解はロシアとプロイセンとなる。ポーランド分割に関しては、対外情勢との関係まで押さえておくこと。

【5】

解答

- A 1 口 2 ニ 3 イ 4 口 5 ニ
B 1 チューリヒ 2 金印勅書 3 アラゴン王国 4 ブルボン家
5 カルロヴィッツ条約

解説

ハプスブルク家の歴史に関する問題。主要な君主の事績については、在位年代も含めてしっかりと覚えておこう。

- A 1 南部10州は、当初は北部7州とともにスペインの支配に対して戦っていたが、途中で脱落した。その後、南部10州は1714年のラシュタット条約でオーストリア領とされたが、1815年のウィーン議定書でオランダ領となり、1830年にベルギーとして独立した。
2 早稲田大政治経済学部は、年代に関する問い合わせが頻出である。バルボアによるパナマ地峡横断が1513年、マゼランによるマゼラン海峡到達が1520年、コルテスによるメキシコ征服が1521年、ピサロによるインカ征服が1533年。早稲田大志望者であればいずれも押さえておきたい。
3 詳しい年代がわからなくても、フェリペ2世の事績について正確に理解できていれば正答を選べるが、念のため年代についても確認しておこう。フェリペ2世の在位年代は1556～98年である。プレヴェザの海戦が起こったのは1538年で、オスマン帝国がスペイン・ヴェネツィア・ローマ教皇の連合軍を破った。フェリペ2世は1571年にレバントの海戦でオスマン帝国を破った。カトーカンブレジ条約は1559年に締結されたイタリア戦争の講和条約。スペインがポルトガルを併合したのは1580年で、広大な海外領土もスペイン領となつたため、「太陽の沈まぬ国」となった。フィリピンは1565年に総督レガスピが領有を宣言した。
4 フリードリヒ2世はフランスの啓蒙思想家ヴォルテールと親交を深めるなど、フランス文化の影響を強く受けた。
5 イ・ハはヨーゼフ2世の政策として著名なものであるが、口についてはやや細かい。ヨーゼフ2世の在位年代は1765～90年である。1781年に農奴解放令・宗教寛容令を発布して啓蒙主義的な改革を進め、税制や軍制の改革を行って貴族勢力を抑え中央集権化を進めたが、貴族らの反発を招いて多くの改革は失敗に終わった。第1回対仏大同盟は1793年、ルイ16世の処刑を機に結成された。
- B 1 やや細かい。ツヴァイングリはスイスのチューリヒで宗教改革運動を指導したが、のちに保守派と争い、カッペルの戦いで戦死した。
2 神聖ローマ皇帝カール4世は、1356年に金印勅書を発し、7人の選帝侯に皇帝の選出権を承認した。諸侯の力はさらに強まり、ドイツ分裂の原因となった。
3 アラゴン王子フェルナンドはカスティリヤ王女のイサベルと1469年に結婚し、79年に両国が合併してスペイン王国が誕生すると、イサベルとともに国王となって共同統治を行った。
4 1700年にスペイン＝ハプスブルク家が断絶すると、フランスのルイ14世の孫がフェリペ5世として王位を継承したが、オーストリア＝ハプスブルク家がこれに反対してスペイン

継承戦争が起こった（1701～13）。1713年のユトレヒト条約によって、スペインとフランスが合邦しないことを条件に、ブルボン家のスペイン王位継承が認められた。

5 オスマン帝国は1687年に第2次ウィーン包囲に失敗した後、ヨーロッパ諸国に対して劣勢となり、1699年のカルロヴィッツ条約でオーストリアにハンガリーなどの領土を割譲した。